

胸部外科の雑誌

保浦 賢三

I. はじめに

胸部外科は、縦隔・呼吸器から心臓大血管などの循環器の外科的治療を担当する部門であるが、内科領域の呼吸器科や循環器科と治療手段を分かち合う特徴がある。そのために治療手段の上でオーバーラップするものがあり、手術を選択するか内科的治療とするか、その治療手段に悩むことがある。例えば、狭心症に対してはステントやバルンによる冠動脈形成術と冠動脈バイパス手術の二つの治療法があり、施設によっては方針が大きく異なることも事実である。多くの場合、ある程度までは内科的治療を行い、それでも症状の緩解が得られない場合は手術治療などの方針が選択される。従って、理想的な治療を患者に施すためには、胸部外科医は基礎知識として個々の疾患の病態生理を熟知し、内科領域の呼吸器科や循環器科の知識を充分知ることが必要であると筆者は考えている。以上のような観点から診療に役立つ雑誌について述べる。

II. 基礎知識習得のために

最近では高齢化社会に伴い、呼吸器・循環器ともに患者数が増加している。また、技術や医療器具の進歩に伴って治療方針や治療技術も急速に変遷している。呼吸器外科の胸腔鏡手術や、循環器内科のカテーテルを主としたインターベンション治療の登場は極めて最近のことであるが、その普及は短時日であり、治療の様相を大きく変化させた。

このような診断技術や治療の変化を知るためには、循環器内科の領域では、「Circulation」[Journal of American College of Cardiology]「American Journal of Cardiology」[American Heart Journal]「Heart」(British Heart Journalの改名)などの諸雑誌を一読することを勧めたい。これらの雑誌にも十年以上も前には多くの心臓外科の論文が掲載されていたが、分化が進み役割分担が明らかとなった最近では、内科的な色彩が強い。内容は、カテーテルによるインターベンション治療などの現況、あるいは診断手技の進歩や薬物治療などに及び、内科的治療上の問題点が理解できる。「Circulation」は最近では基礎的な分子生物学や遺伝子などの論文が増加し、日常の臨床では手術時の出血、術後は血行動態の不良と感染に悩むことが少なくない外科医には、理解しがたい点も多い。しかし、循環器疾患の基礎と循環器内科医の思考法を知る上では、価値の高い雑誌である。

循環器領域は欧米においては日本よりも患者数が遙かに多く、研究・臨床ともに進んでいる感があり、これらの雑誌を読み循環器学の新しい流れを知ることは胸部外科医には有益である。また、内科医の思考法を理解することは、一つの疾患に対して共同で適切な治療するために極めて重要なことである。

本邦の胸部疾患関係の雑誌は「心臓」(丸善)、「呼吸と循環」(医学書院)、「日本循環器学会雑誌」(英文誌)などがある。これら諸雑誌のなかには厳しい査読制度を取り入れているものも含まれ、優れた内容の論文も掲載されている。ただ外国の報告に追従して行われた実験や臨床

の報告も多く、それが欠点である。邦文誌は何と云っても寝る前に少し読んだり、通勤途中や出張の車内での暇を見つけて手軽に読み、知識を習得できる利点がある。

Ⅲ. 胸部外科医としての専門知識習得について

胸部外科で権威ある雑誌としては、「Journal of Thoracic and Cardiovascular Surgery」(The American Association for Thoracic Surgeryの公用誌)と「Annals of Thoracic Surgery」(The Society of Thoracic Surgeonsの公用誌)の二誌が挙げられる。これらの雑誌はほぼ世界中からの投稿を厳しい査読制度で選択し、査読者と投稿者とのやりとりの結果、論文が受理され掲載される。従って、示唆に富む論文が多く、大学病院を始め多くの病院図書館に準備され、抄読会などにもよく用いられている。最近の傾向として前者はやや実験的研究などの論文が多く、後者は臨床的研究や手術上の工夫が掲載される特徴がある。これらの雑誌は倫理面においてもなかなか厳しい判断を示している。近年話題になっているブラジルで開発されたバチスタ手術(拡張型心筋症に対する左室縮小手術)については、その臨床経験が投稿されたものの、インフォームドコンセントその他の問題から、これらの雑誌の編集スタッフはバチスタ手術を実験的医療とみなして、数年間は採択しなかったという。

筆者は駆け出しの頃、胸部外科をもっと勉強しようとして大望を抱き、これらの両誌を購入したことがある。ところが、毎月定期的に送付されてくる英文雑誌を読みこなすことは実に困難で、やがて積んでおくだけになり、結局は契約を数年で解消してしまった。しかし、十数年以上経てから家人に云われ書棚に溜まり変色したこれらの雑誌の処分を考え、処分前にバラバラとページをめくると、古い雑誌でありながら実にその内容は新しいものであり、廃棄することをためらうものであった。問題の本質や真理を追求した論文はいつまでたっても読みごたえが

あるものであり、一見進歩した診療内容もさほどそのコンセプトは変わっていないことを痛感した。

前述の循環器内科の「Circulation」では、supplement号に心臓血管外科の特集が組まれるが、これは必読すべきである。欧米の一流の施設からの外科医による論文が多く、一つの外科治療についての遠隔成績や新しい治療法の厳しい評価がされ、自らの診療を反省し、選択すべき治療法を考案する上で有用である。他にヨーロッパの雑誌として「Thoracic and Cardiovascular Surgeon」と「European Journal of Cardio-Thoracic Surgery」がある。非アングロサクソン系のドイツ、フランスやスイスなどのヨーロッパの胸部外科医のものの考え方と発想を知る上で興味深い。時に実に奇抜、卓抜なアイデアも見受けられ、参考になることが少なくない。

呼吸器外科に大きく比重を置いた外国雑誌としては、「Chest」と「Thorax」があり、いずれも最新の呼吸器外科あるいは呼吸器疾患の知識を得るためには、有益である。他に、肺癌などの特定領域を調べたい場合の雑誌としては、「Cancer」がある。

本邦の雑誌としては、最近英文雑誌になってしまったが、「日本胸部外科学会雑誌」が本邦の胸部外科の臨床や研究の現状を知る上で便利である。同様に「日本心臓血管外科学会雑誌」や「日本呼吸器外科学会雑誌」も、本邦の治療レベルを知る上で参考となる。商業誌としては、「胸部外科」(南江堂)がある。本邦の胸部外科発祥以来共に歩んできたと自負するだけの歴史があり、これまでに多くの胸部外科医に話題を提供し、本邦の胸部外科発展への貢献は大きい。邦文であるだけに読みやすく、容易に知識を習得できる利点があり、手術方法や症例報告などの掲載記事には執筆者の手術上の苦労やコツといった内容を読み取ることが可能である。とくに手術のコツについては、欧文雑誌では外国語であるだけにくみ取れない場合があるが、邦文

誌はこの微妙な雰囲気を行間に読みとることができる。胸部外科のトレーニングを行う初心者が一読する価値があり、また経験を積んだ外科医でも実際の臨床を行う上で有意義な情報が得られる。

Ⅳ. 胸部外科のトレンドを知る上で

現在世界の経済・政治の中心である米国の外科学会、American Surgical Associationの公用誌である「Annals of surgery」にも、胸部外科関係の論文が時に掲載されることがある。内容としては、一つの時代を作った外科医の紹介記事、低侵襲手術等の新しい技術の流れ、社会・経済と外科学との関係等の内容もあり、医学医療、あるいは外科という大きな枠の中での、胸部外科の置かれた立場を認識させられる。例えば、心臓外科医の評価が消費者ガイドに相当する書籍に掲載された場合の医療情勢の変化、またミニマムサージャリーの登場による患者側の反応など興味深い内容である。これらの内容を通読すれば、胸部外科という外科の一部門のみにこだわらず、大きな観点で現在あるいは今後の胸部外科の存在意義を認識し得る。

学問的に極めてトピックメーカーな胸部外科関係の話題は、「New England Journal of Medicine」あるいは「Lancet」などという医学広汎の知識を伝える伝統ある雑誌にも時に登場することがある。

Ⅴ. 特殊な領域

本邦では再開されてから日も浅く、専らマスコミの話題になってしまっている感の移植領域については、「Journal of Heart and Lung Transplantation」が胸部外科領域の移植の話題や研究を掲載している。人工心臓などの人工臓器については「Artificial Organs」、弁膜症

や人工弁については「Journal of Heart Valve Disease」などの専門雑誌がある。

Ⅵ. 結語

胸部外科領域の主たる雑誌について紹介した。しかし、毎月これらの雑誌全部に眼を通すことはなかなか困難である。もし行ったならば確かに豊富な知識は得られるであろうが、それはあくまで知識に過ぎない。医師としての実力は、実際の臨床の場での五感を基礎とした経験により得られるものであり、経験を補完するものが図書室で得られる知識である。

医療医学の研究においては、あまり多くの知識に通曉しすぎるのは弊害があると、筆者は考えている。過去の世界歴史を振り返れば容易に理解できるが、素人（アマチュア）的な発想が、停滞した局面を大きく変化させ新時代を切り開いた事例は実に多い。歴史学者は、戦史においてはいつもアマチュアとプロの対立があり、勝利はいつもアマチュアにより得られたと評する。戦争に際しての兵器や戦術ばかりでなく、医学における手術手段や医療器具などの技術的進歩には、過去や過去を引きずった形の現状へのこだわりは障害になることも多い。従って他人の考えばかり追求し共鳴しては、自らの思考も他人の発想に染められてしまい、結局自らのもつ独創性は失われてしまうことになりかねない。

図書室での雑誌読破は、他人はどう考えるか、その考えは正しいか否かを皮肉な眼で判断し、若干の距離を置いて内容を吟味すべきものである。胸部外科領域では、欧米の研究あるいは診療は実に懐の深いものであるが、そのレベルを凌駕するためにはこのスタンスこそ、本邦発信の独創的な治療法を生み出すものと、確信する次第である。